

## 西脇順三郎先生の思い出

高宮利行

私が西脇先生（1894 – 1982）とお話できるようになったのは大学院の修士課程に入ってからだった。既に現役を引退した名誉教授として、西脇先生は週に一度大学院での講義演習に来塾された。確か火曜日午後の4時間目に、三田の研究室で行われたと記憶する。三田の山に来られた先生は、南校舎の教員室には寄らず、現在の西校舎の斜め前にあった2階建ての教員用の古い研究室棟に来られて、岩崎良三先生の部屋で休憩を取られていた。そこにお迎えに上がるのが修士一年目の私の役目で、ご一緒に歩いてご案内するのだが、身長にも差があり、何せ相手は70過ぎのご老人、今の70歳とは異なり、十分ご老人然としていたから、歩調を合わせるのに苦労した。怖い体験でもあったのか、慣れないからか、新研究室棟のエレベーターに乗るのは遠慮されて、ゆっくりと3階まで階段を上がるのが常だった。

講義では教科書やメモは一切使わず、淡々とお話をされた。新潟県の小千谷ご出身だったので、少し地方訛りがあり、なおかつ大声ではなかったので、10名ほどの院生相手でも、声の通りは決してよくなかった。ある日、先生は入室されるや否や、「今日は入れ歯をしてくるのを忘れたから、少し聞き取りにくいかもしれない」と言われた。それほどの違いはなかったはずだが、この一節は、一杯飲んだ時先生の物真似する際に、私の得意芸となった。

先生が標榜される超現実主義の詩論は、常識では結びつかない二つの言葉ないし概念を強引に結びつけることによってこそポエジーが生まれるというものだった。まるで17世紀の形而上学の英詩人、ジョン・ダンの「奇想」Conceitと類似しているのではないかと思った。先生はあるとき、その例として『ハムレット』第3幕の一場面を取り上げた。

Hamlet: Do you see yonder cloud that's almost in shape  
of a camel?

Polonius: By th' mass and 'tis like a camel indeed.

Hamlet: Methinks it is like a weasel.

Polonius: It is backed like a weasel.

Hamlet: Or like a whale?

Polonius: Very like a whale. (Hamlet, Arden 3, III. ii. 367-73)

草むらに寝そべって空に浮かぶ雲の形を目で追うハムレットが、あれはラクダ、あれはイタチ、あるいはクジラ？と想像をたくましくすると、横にいるポローニアスほどの問いにも仰せの通りでございます、と応じるのである。当時の聴衆は、ラクダ、イタチ、クジラを視覚化できただろうか。動物園の性格も持ちあわせていたというロンドン塔では、外国からの賓客が連れてきた贈答用のラクダの存在が知られていたかもしれない。また漁業の従事者ならクジラを見た、あるいは彼らから聞いた人もいただろう。一方、イタチはといえば、大

昔から家の屋根裏に住み込んで動き回る四つ足動物だったから、誰もが知る親しみやすい小動物だった。ところが、現代のわれわれはフェレットなら知っていようが、イタチは動物園で辛うじて観るぐらいだろう。

西脇先生は、ハムレットが使うイタチ weasel に注目して、シェイクスピアは当時ならだれでも馴染みある小動物に言及して新機軸を打ち出したという。「想定外のイメージだからこそ、ここに『詩』が生まれるのだ、雲の形がウサギやヒツジではありきたりで何ら面白くない」と言われた。そして「シェイクスピアの偉大さは面白いストーリーテラーとしての能力ではない。予想もしないイメージの結合による詩想の豊かさこそ素晴らしい」と語った。黙って拝聴している院生たちはみななるほどと感心した矢先、さらに先生の真骨頂が待っていた。「イタチはフランス語やドイツ語では何といいますか」。尋ねられても、私たちは誰一人答えられない。直ちに演習机の周りに置かれた辞書類を動員して、対応していく。「イタリア語は、ラテン語は、ギリシャ語は？」と畳みかける先生。「どの国の民家にも棲みつくイタチだから、必ずや共通点があるはず」というのが、質問の動機だった。比較言語学的追求は、さらに海を越えて「サンスクリット語では？」と続き、「漢音では？」で最高潮となった。勇気ある院生の一人が、隣の中国文学の研究室を訪ねて「イタチは漢音ではチュン」との回答をもって帰ってきた。すると先生は破顔一笑、「ウィーズルとチュン、似ていますねえ」と明言された。ええ！との声上がる。実は、先生はこのころ、サンスクリット語を仲介とするギリシャ語と漢語の比較研究ノートを作成しておられたのである。あまりに気宇壮大な計画だったので、先生の学者としての名誉を慮かって、周囲は必死で公刊することは断念してもらい、原稿をコピーした限定私家版を先生の米寿記念に関係者にだけ販売した。この稀有な著作は古書市場に出ることはほとんどなく、出ればとんでもない価格が付くはずである。

こんな高レベルの講義が毎回ではなかったが、出席者は常に啓発されたはずだ。講義の途中で助手の山田隆一先生が隣の部屋に入ってきて、終了まで待機、そのままお二人で仲通りの小料理屋で一杯やるというパターンが、何年もの間習慣化していた。そこに、鍵谷幸信や新倉俊一といった西脇研究の学者たちも集うのであった。残念ながら院生だった私に陪席の機会はなかった。

難解な西脇詩の解釈は頭痛の種だったから、機会があれば直接質問をぶつけようとするファンも多かった。私があるとき、「この詩のこの部分はどこに句読点が入るのでしょうか」とお尋ねすると、先生はしばらく詩行をご覧になった後「これはどなたの詩ですか」と言われたのである。私の膝はがくと折れそうになったのだが、こんなことで驚いてはいけない。東京女子大に招かれて講演されたとき、冒頭で「ここは女子学生が多い大学ですね」とおっしゃったとか。

西脇先生が文学研究科の委員長時代、定刻になっても教授会に姿をお見せにならなかったもので、当時助手だった鈴木孝夫先生がキャンパス内を探したところ、図書館前の草むらで腰を折って、何かに夢中だった。「教授会が始まりますよ」と声をかけると、西脇先生は「そ

れよりこれが犬のふぐりだ」と言って指さした由。子供のような心の持ち主だった。先生はこの植物の音の響きに惚れたらしく、自作詩に何度か変容しながら登場する。

文字通り超現実的に見える行動をする先生だったが、存外俗物でもあったことに却ってほっとする。先生が勲二等を受勲した時、皆でお祝いの言葉をお伝えすると「勲二等などたいたことはない。相良君は勲一等ですよ。彼は官学だから」とのお返事だった。要するに、ドイツ語の権威、相良守峯博士は東大出身で東大教授だったから、私学の自分よりも勲位が上なのだ、という怨念が感じられるのである。同僚たちに「いつ塾長にしてくれるのか」と尋ねたというエピソードも残っている。

私は一度だけ、代々木上原にお住まいだった西脇先生のお宅にお邪魔したことがある。あらゆる部屋に本が満杯に収められていた。驚いたことに、玄関の下駄箱に *OED* 全巻が入っていた。*OED* は3度買われたそう。最初のセットは火事で焼かれ、次のセットは戦後の困窮時代に売り払った、しかしその後どうしても必要となり神保町で買い求めたら、それは以前に売ったセットだったとか。これなども西脇先生らしいエピソードではないだろうか。

先生は俳句の世界にも関心を広げられていた。それを知った私が「先生、次の世界で生まれ変わるとしたら、英国人がいいですか、日本人ですか？」と伺ってみたことがある。先生は即座に「そりゃ、英国人ですよ。いろいろ無駄なくやれるから」と答えられた。若いころ、オクスフォードに籍を置きながらもロンドンの詩壇で活躍していた4年間の英国留学がそう言わせただろうか。

追記 昭和59年、三田文学ライブラリーから『回想の西脇順三郎』が出版された。

## 厨川文夫（1907－1978）先生の思い出

高宮利行

私が厨川先生と初めてお会いしたのは北浦和の三室にあるお宅であった。1966年春に慶應の経済学部を卒業することになっていた私は、就職したくない一心で他学部への学士入学の可能性を探るべく、ゼミで卒論指導を受けていた島崎隆夫教授に相談に出向いた。英語が好きだという理由だけで「英文科に学士入学したいのですが」、と申し上げると、英文科の厨川先生を存じ上げているから紹介状を書こうと言ってくださった。そして厨川先生に面会を乞うお手紙を出したところ、どういうわけか三田の研究室ではなく、浦和のお宅に来るように指示された。その当時はナビなどなかったの、地図で探しながら、まだ周りに畑が散在する三室という場所に車で出かけた。

愛想よい圭子夫人に迎えられて案内された二階の書齋で、瘦身の厨川先生と初対面となった。文学作品はろくに読んでいなかったの、英語音声学を勉強したいと申し上げると、英文科にはその専門家はいない、学士入学すると2年生の専門課程に置かれた英文学史や原典講読も履修しなければならないから、Ivor Evans, *A Short History of English Literature*, Otto Jespersen, *Essentials of English Grammar*, Daniel Jones, *An Outline of English Phonetics*の三冊をあらかじめ読んでおくとよいと言われた。今となっては題名すら正確には憶えていないが、ともかくも帰宅後入手して読んでみた。入門書なのにほとんど歯が立たなかった。

緊張しながらの面談の最中、書齋に立派なオーディオ装置があるのが目に留まった。英国製のスピーカーだった。オーディオファンだった私がクラシック愛好家ですと申し上げると、先生はリヒアルト・シュトラウスの交響詩『ドン・キホーテ』をかけてくださった。これは知る人ぞ知る玄人好みの名曲だった。柔らかい独奏チェロの音色が部屋中に広がった。「自分はこういった散文的な曲が好きです。文学でもね」と意味深長なことをおっしゃった。それ以来、お中元やお歳暮を手にお宅に伺うたびに、お茶菓子付きの面談の締めくくりはレコードを拝聴することがパターン化したのを覚えている。私がラファエル前派の絵画が好みだと申し上げると、先生も「いいですね、ロンドン留学中はよくテート美術館に観に行ったものです」と言われた。要するに、私と先生の間で趣味が一致したのである。もっとも若かりし頃の先生は、私とは異なり、登山、水泳、それにスキーの達人だった。

4月初めに学士入学の選抜試験が行われた。30分ほどの英作文の筆記試験と専任教授らとの集団面接だった。この時、厨川先生からは「貴方の英作文は十分意味は伝わりますが、文語と口語が混じっていますね。その点を今後注意してください」とのアドバイスがあった。また尊敬する人物としてワグナーの名前を書いておいたところ、岩崎良三先生から「福澤諭吉ではないのですか」と突っ込まれたので、30分以上にわたってワグナー論争をやったことも記憶に残った。これには学部で三田レコード鑑賞会に所属していたことが役立つ

た。

さて、授業が始まってみると、学部の英文学史ではオクスフォード留学から帰国してまもない安東伸介先生が張り切っておられ、厨川先生は古代中世英語学の講義と大学院の中世英文学の演習を担当しておられた。毎回教室の最前列に陣取った私は、先生の入室とともに立ち上がったので、授業は起立と礼から始まった。ほかの授業では見られない風景だったが、厨川先生にはびったりだった。先生は 120 名もの履修者がいる学部の講義でも、まめに出席カードに記入させておられた。4 年の 6 月ごろだったか、授業の終わりに先生が降壇されて、前列に座っている私に向かって「高宮君は大学院を受験なさいますか」と聞かれた。まだ決めかねていたのだが、その場の雰囲気では「はい受けます」と答えてしまったのである。当時は 9 月末と翌年の 3 月に修士課程の入学試験が行われた。私は幸い秋の試験で受かった。

3 年の夏休み前だったか、授業が終わった先生に「卒論は英語学でやりたいのですが」と尋ねると、先生は即座に「いいですね。OED はもっていますか。Skeat のチョーサー全集は」と畳みかけて来られた。「いえ、SOD (*Shorter Oxford English Dictionary*) はもっていますが」と答えるのが精一杯だった。まじめな私は早速、13 巻の OED と 7 巻の Chaucer 全集を買って求めた。そのころ古書店で見つけた尾島庄太郎著『英吉利文学と詩的想像—ケルト民族の稟質の展開』(北星堂書店、1953) に魅かれた私は、英文学にもワーグナーが扱ったトリスタンやパルジファルを主人公とするアーサー王伝説があることを知った。ちょうど厨川先生ご夫妻が共訳されたばかりの『アーサー王の死』を読むと、王への忠誠とグィネヴィア妃との不義密通の間で葛藤するランスロットの物語が実に面白かった。数年後私は、早稲田大学の博士論文を基に出版された尾島氏の著書が、英国で出版された Margaret Reed の研究書を下敷きにした著作であることを突き止めた。ちなみに、後にマロリーの文体について日本大学で博士号を取得した中島邦男氏の著作も、Peter Field 教授の研究に準拠したものだ。あきれてものが言えない状況だったのである。

私が厨川先生に卒論にマロリーを扱いたいのですがとお伺いを立てると、先生はのっけから「これで博士号を取るには 10 年かかりますよ」と断言された。そして「第 5 巻は難関だから、まず物語の後半で勝負しなさい」と忠告してくださった。取り急ぎ書誌を作るようにとの示唆を受けたわたしは、図書館カードを用いて情報を集積した結果、修士修了までに 4000 枚が集まった。これが後々役立ったことは言うまでもない。卒論審査では先生から「貴方の論文には何か学界への貢献がありますか」と問われた。先生は相手が学部生でも、ご自分と同じレベルに引き上げてしか考えない方だった。いわゆるダブル・スタンダードがなかったのだ。かくして私たちは大いに苦しむのであった。

大学院での厨川先生の演習も厳しかった。Kenneth Sisam, ed., *Fourteenth Century Verse and Prose* にある Gower のテキストを少人数で輪読するやり方で「どんな些細な単語でもグロッサリーできちんと調べなさい」と言われた。それにもかかわらず、次回の演習で of を引いて来なかった女子学生に対しては厳しく叱責された。「鉄は熱いうちに打て」の言葉

通り、その後演習室の雰囲気引き締まったのは当然だった。わずかな息抜きは、一学年上の先輩が質問して、厨川先生から回答を引き出す時間だけだった。

私は修士論文の主題に再び Malory, *Le Morte Darthur* を選んだ。対象を Lancelot の末弟 Sir Gareth of Orkeney に絞り、作品全体の執筆順序の観点から見直して議論することにした。出来上がった論文でいささか自信があった一章をまとめて、日本英文学会の *Studies in English Literature* に投稿した。出来上がった抜き刷りを Harvard の Larry Benson 教授に送ると、彼が新著で言及してくれたので、厨川先生はわがことのように喜んでくださった。

厨川先生は、大正デモクラシーの寵児と謳われた厨川白村（本名辰夫、1880-1923）の長男として熊本で生まれた。父親は恩師の漱石と同じく第五高等学校の教授だった。その後白村は、わが国の見合い結婚は隷属結婚だとして糾弾し、恋愛至上主義を標榜する京都帝国大学教授となる。ベストセラー作家の彼は家に起居せず、祇園の先斗町から講義に通うほどだった。父親とはほとんど会う機会がなく、また母親の蝶子夫人が引っ越し魔で月に一度ならず住処が変わったとは、厨川先生から直接伺った話である。加えて、大学受験を控えた9月1日、鎌倉に建てたばかりの別荘を関東大震災が襲い、新学期を前に夏季休暇を楽しんでいた白村は、足が不自由だったために逃げられず、津波にさらわれた。翌日園丁が、近くの橋の欄干にひっかかって虫の息だった白村を発見したが既に遅かった。幸いだったのは、第三高等学校の最終学年だった文夫先生が新学期に間に合うように、一足先に京都に戻っていたことだった。まじめな先生も非業な運命の車輪に弄ばれた結果、たばこに手を出し、自堕落な生活を送ったために、肺結核を病むことになった。主治医が、病みあがりの身で入試科目の多い東京帝国大学への受験準備をすることに反対したため、今も昔も科目数が少ない慶應義塾大学の文学部を受験することとなった。入学した文学部予科の同級生には、山本健吉（文芸評論家）、蘆原英了（舞踏評論家）、樋口勝彦（ラテン語研究者）、瀧口修造（美術評論家、詩人）ら錚々たる面々がいた。厨川先生にとって、専門課程の英文科での指導教授は随筆家でもあった戸川秋骨と西脇順三郎だった。4年間の英国留学から戻って直ちに英文科教授となった西脇先生は、講義で自らの超現実主義詩論に言及することなどさらさらなく、オクスフォードで学んだ中世写本の所蔵番号を次々と黒板に書き続け、それらを黙々とノートに書き留めながら関心を示した唯一の学生が厨川先生だった（『回想の厨川文夫』、p.22）。

ディケンズの小説を耽読していた先生は、この素晴らしい文学以前にはもっと興味深い文学があったのではないかと、シェイクスピアの演劇に注目、次第に遡ってチョーサーを発見、最終的に行きついたのが10世紀ごろに古英語で書き留められた『ベーオウルフ』だった。先生は優れた校訂版を用いて、この叙事詩を邦訳した。しかもその大業に当たっては、戦記物の『平家物語』の文体を分析した結果、これに倣った擬古体を用いたのであった（それゆえ現代読者には難解となった）。卒業論文の一部となったこの訳業は学部3年の時に完成し、英文科で始まった紀要に掲載されたため、当時は東京帝国大学の優れた卒論にしか与えられてこなかった日本英文学会の岡倉賞を得て、ほどなく岩波文庫から出版されるまで

になった。学部生の卒業論文がそのまま岩波の文庫本に採用されるとは誰が想像しただろう。

学部卒業と同時に文学部の助手に任用された厨川先生は、46歳の1953年、一年間の欧州留学に出発、仏英で半年ずつ研究する予定だったが、パリの国立図書館で神秘主義者 Walter Hilton の『完全に関する8章』の未校訂写本を発見したために、当初の研究計画を反故にして、同書の他の写本の発見と転写に時間を費やした。その努力は慶應義塾大学言語文化研究所から出版した校訂本に結実し、慶應義塾より1967年度の福澤賞を受賞した。1971年に脳出血で倒れたが急死に一生を得て、1973年に慶應を定年退職、名誉教授に任ぜられるとともに、成城大学文学部教授に就任した。その後圭子夫人と三度スイス旅行をして、その地で客死した敬愛する学者 W. P. Ker の足跡に思いを馳せた。しかし、持病の喘息で発作が出たため、1978年1月15日呼吸麻痺で急死した。享年70歳だった。その直前に慶應で博士号を取得した江藤淳氏の肝いりで、従4位勲3等に叙せられ、旭日綬章を授かった。京都市黒谷の厨川家の墓地に新たに文夫の墓が作られ、墓碑銘として、先生自身の翻訳による『ベーオウルフ』の一節が刻まれた。その碑文は「魂は彼が胸より真の栄光の許を訪れむとて去りゆきぬ」である。

あくまでも謙虚で、大げさにことを構えるのを潔しとしなかった厨川先生は、還暦や古希の記念論文集の出版も、著作集の編集も遠慮されたまま鬼籍に入られた。門下生だった安東伸介、岩崎春雄、高宮利行の3名は、先生の死後圭子夫人の同意を得て『厨川文夫著作集』全2巻を編集、1981年に金星堂から上梓した。

先生の信条は、テキストの緻密な読解を基礎にして文学を論じることだったと考えられる。それゆえ単なる英語学の計量的な分析ではない。文献学 (Philology) の本質と言ってよい。わたしは先生の数多い著作の白眉として『中世の英文学と英語』(研究社、1951年)を挙げたい。戦時中に蔵書が灰燼に帰したにも関わらず、戦後入手したテキスト類と昔からの記憶によって書き上げられた中世英文学史の精髓と呼べるだろう。

追記 『回想の厨川文夫』(三田文学部ライブラリー、1979年)には、生前の先生を知る人々のエッセイが収録されている。